

【アクティブ・ラーニング実践報告書】

地域観光研究 in 飛騨高山

商品開発&SDGsの体感&中大接続



2019 年 10 月

多摩大学・経営情報学部

はじめに

多摩大学では、2017 年度より飛騨高山大学連携センターとの協働の下、飛騨高山アクティブラーニング・プログラム）を年に 2 回実施しており、今回で 5 回目を迎えた。飛騨高山 AL プログラムは、都市部に居住する本学学生が飛騨高山に赴き、地域の方々とともに地域の課題解決に努め、学生目線での地域活性化に向けた提案を行うことを目的としている。

今回のプログラム（2019 年 10 月 20 日（日）～10 月 22 日（火））の概要は、以下の通りである。初日の午後は、昨年度のプログラムで商品化された「りんごの朴葉みそ」のメニュー等の提案、また第二弾としてりんごを用いた商品のアイデアを提案した。2 日目の午前は、2019 年 7 月の飛騨高山 AL プログラムにて学んだ SDGs を体験・視察した。2 日目の午後は、久々野中学校に訪問し、リンゴジュースの POP を作成した。また、学生は 2 日間、久々野町の皆さんのご自宅にホームステイをさせていただき、ご家族との交流を図った。最終日の 3 日目は、一宿一飯の恩義として各ご家庭のお手伝いをさせていただいた後、振り返りを行った。本報告書は、その活動事例をとりまとめたものである。

文責：多摩大学経営情報学部 専任講師 野坂美穂

1. 2019 年度・飛騨高山 AL プログラムの目的および概要

(1) AL プログラムの目的

2019 年度の飛騨高山 AL プログラムは、「商品開発&SDGs の体感&中大接続」をテーマとした。今回は過去の飛騨高山 AL プログラムとの連続性を有している。具体的には、昨年 2018 年度 10 月のプログラムのテーマであった商品開発の第二弾の実施、そして中大接続については、昨年度の 1 クラスから今年度は全校規模へと発展した。また、今年度 2019 年 6 月のプログラムのテーマであった SDGs については、今回は実際に SDGs を体感する内容であった。

上記のプログラムを通じて、学生が久々野町という地域に対してどのように地域貢献を行うことができるのかを考え、具体的に実践していくことが本プログラムの目的の一つである。また、今回のプログラムのもう一つの主な目的は、久々野町でのホームステイを通じた人的交流である。都会に住む学生が「地域の活性化」や「地域貢献」について自分事として考えるには、まずはそこに住む人々を知り、それら人々の魅力について理解することが求められる。

(2) AL プログラムの概要

本 AL プログラムの概要は、以下の通りである。

表 1. 飛騨高山 AL プログラムの概要

	概 要
日 程	10 月 20 日～10 月 22 日日（2 泊 3 日）
活動場所	高山市久々野町
参加者数	多摩大学 学部生 12 名、社会人大学院生 3 名 教員 3 名（金美徳教授、高橋恭寛准教授、野坂美穂専任講師） 職員 1 名（教務課・福井）

(3) 当日のプログラム内容

【1日目】10月20日(日)

時 間	内 容
14:00	集合 場所：高山駅西口ロータリー
14:00～14:30	移動
14:30～18:00	【大学×地域】 商品開発提案のプレゼンテーション 総合司会：野坂（多摩大学） 久々野町についての説明 久々野まちづくり運営委員会 SNS 活用による魅力発信についての意見交換 ・商品開発のプレゼンテーション+質疑応答 司会：高橋（多摩大学） ・地域住民との意見交換(60分) 挨拶 金（多摩大学） 場所：高山市久々野支所
18:00～19:00	夕食
19:00	民泊

【2日目】10月21日(月)

時 間	内 容
9:00	集合
9:00～12:00	笠原木材(株) ・会社内で作業体験(180分) (株)長瀬土建 ・チャオ(高根)ウッドチップコース見学(140分) ・宮峠トンネル見学(40分)
12:00～12:30	移動
12:30～13:00	久々野中学校にて給食
13:00～15:30	【大学×中学校】 リンゴジュースの紹介に関する POP 作成
15:30～18:30	久々野地内 (堂之上遺跡、道の駅)
18:30～20:30	懇親会
20:30	民泊

【3日目】10月22日（火）

時 間	内 容
8：30～9：30	各民泊先で恩返し作業
9：30～10：00	移動
10：00～11：00	グループワーク AL 振り返り、多摩祭・AL 祭の役割分担、シフト決め 久々野支所
11：00～11：30	移動
11：30	解散 場所：高山駅西口 ロータリー

3. 当日プログラムの内容

【1日目】 商品アイデア提案プレゼンテーション

(1) 久々野の魅力情報発信

はじめに、久々野まちづくり運営委員会・山崎会長より「久々野のまち」について、動画とともにご紹介いただいた。また、昨年度から実施している「久々野の魅力情報発信事業」についてご説明いただいた後、久々野の魅力の効果的な SNS の発信方法について、チームに分かれてディスカッションを実施した。ディスカッション後は、各チームで話し合った内容を発表した。



(2) りんご味噌のメニュー開発およびりんごを用いた商品開発提案

次に、本学学生より「りんご味噌」を用いたメニュー提案、そして久々野のりんごを使用した商品提案の第二弾について、4チームがプレゼンテーションを行った。





【学生による振り返り】

- ・地元の方々からは、「今回の提案は、独創的で商品化しやすい」との評価をいただいた。今後は、商品開発を提案する「目的」が何であるかについての議論を深めることで、よりよいグループワークになるようにしたいと思う。
- ・自分自身はプレゼンテーションに慣れておらず、全くと言っていいほど伝えたいことが伝えられなかった。プレゼンテーションの上手な学生を見て、プレゼンテーションがいかに大切かを学んだ。
- ・グループのリーダーとしてのアプローチを常に意識し、商品開発プロセス・プレゼン方法、それに伴う資料作成に至るまで、様々な場面でチームビルディングとはいかなるものかを考えさせられ、貴重な体験となった。



【2日目】 SDGs の体感・中大接続

(1) SDGs の体感

2日目の午前は、春学期のプログラムで学んだ SDGs に関する企業様での取り組みについて、実際に体験および視察が行われた。

A. 笠原木材

笠原木材での作業内容は、「土砂と木片の選り分け」である。木材切り出しの際に、切った木に付着した大量の土砂のなかに木の枝や幹・石などが混在しており、それらを土砂から弁別して取り除く必要があるが、機械では難しいため手作業で行った。残った土砂についてはまた森に還元する。この作業は費用がかかるが、森林の保全においては重要な作業である。



B 長瀬土建

長瀬土建が手掛けている間伐材を使用したトレイルラン、建設中のトンネルを視察した。このトレイルランは、箱根駅伝で有名な青山学院大学も練習に訪れている場所である。



(2) 中大接続

2日目の午後は、久々野中学校に訪問した。久々野町のPRの一環として、中学生は久々野の名産であるリンゴのジュースラベルを作成し、そのリンゴジュースを持ち歩き、インバウンド観光客等にPRする予定である。このPRに必要なPOPの作成を、本学学生と中学生が話し合いながら作成した。本学学生は、中学生の想いを聞き出しながらPOPのアイディアをまとめた。このアイディアを大学に持ち帰り、本学学生はパワーポイントやイラストレーターを使用してPOPを作成、その後中学校に送った。





【学生による振り返り】

- ・中学生の純粋な「地元への想い」に触れながら行ったグループワークは新鮮であり、刺激を受けた。
- ・大学に持ち帰ってPOPを作成する際は、できるだけ中学生の想いをそのまま伝えられるように、あえて加工しないように工夫した。
- ・中学生が自分達の住む久々野を誇りに思っていることがよく分かり、その気持ちを打ち消さないようにPOPの作成に努めた。
- ・私たち大学生では思いつかないようなフレッシュなアイデアが出たり、柔軟な考えであったため、互いに刺激を受けた。
- ・自分自身が中学生だった頃と比べると、久々野中学校の生徒は私が考えていた以上に自分達が育った地域のことを深く考えており、地元に対する強い想いと真剣な姿勢が見受けられた。彼らの意図する内容を具体的に拾い上げるのに苦労したが、アウトプットを促すことで、彼らの想いを詳細に表現することができた。
- ・中学生の意見を尊重し、リーダーシップを発揮できたと思う。



久々野中学校訪問後は、久々野にある縄文住居遺跡群「堂之上遺跡」を見学した。



【3日目】

一宿一飯の恩義として、お世話になった民泊先のお手伝いをそれぞれ行った。その後、久々野支所にて、今回の AL プログラムの振り返りを行った。



【プログラム全体を通じての学生による振り返り】

- ・ホームステイ先では、各集落に存在する神社で行われる祭りが過疎化や合理化によって減ったことについて話を聞くことができた。その他に住民同士の関係が緊密であること、伝統的な「地縁や血縁の濃さ」も他の地域とは異なる久々野の魅力であると感じた。QOL や生きがい重視される今日において、人のつながりや自然の力は、生活の利便性に勝る何にも代えがたい価値を有している。また、「関係人口」という点からみても、久々野の人々が持つ魅力は大きな資源の一つであると感じた。
- ・観光客や移住者を増やすうえでも地域活性化を行ううえでも、中心にあるのは久々野の伝統やアイデンティティであり、それをなくしては意味がないと強く思う。
- ・今回のメインプログラムであった久々野中学校の生徒との交流では、現地の食材を使った給食を食べたことは良い経験となった。東京や神奈川県食料自給率と比較すると、久々野町では「地産地消」の給食を食べている事実は、地域活性化や地域貢献の一翼を担う良い取り組みであると考えられる。
- ・今回はホームステイであったため、ホームステイ先の方々と交流し、久々野町や方言について、そして都会との違いなど様々な話をしながら人々の温かさを感じた。中身の濃いプログラムであった。

終わりに

今回のプログラムでは、学生は、地元の久々野中学校の中学生との交流や民泊など「人的交流」を通じて、久々野町という地域の人々の温かさを知る機会を得たようである。学生の振り返りでは、久々野町の一人一人が、地域に愛着を持つとともに誇りに思っていることを改めて感じたという意見が多く見られた。

久々野町の最も大きな魅力はそこに住む「人」であり、それら人々のつながり、そして自然や文化などを含めた久々野町の魅力をどのように伝えていけばよいのか、今回のプログラムを通じて学生一人一人が自分たちなりにできることを考える機会にもなりえたのではないかと思われる。

(謝辞)

本 AL プログラムに、多大なご協力・ご支援をいただきました飛騨高山大学連携センター、久々野まちづくり運営委員会、高山市役所久々野支所、久々野町の皆様には改めて感謝申し上げます。また、今回のプログラム実施にあたり SDGs の体験学習でご協力いただいた、笠原木材様、長瀬土建様にも厚く御礼申し上げます。

文責：多摩大学経営情報学部 専任講師 野坂美穂